

---

# THE SKY BLUE IN THE SKY

朋次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

THE SKY BLUE IN THE SKY

### 【Nコード】

N3912P

### 【作者名】

朋次郎

### 【あらすじ】

LDの話を、その母親、その子供自身、小児科医それぞれの立場で書いています。連載終了後もちよくちよくご覧頂いている作品です。1日1アクセスだけど。よろしければ読んでください。

## 詩織の画用紙ある聴覚性LDの女の子の親の話・前編

詩織は鈴木啓太と33歳で見合い結婚して3年目で鈴華を産んだ。子供がすぐにでも欲しかったがなかなかできなくて排卵誘発剤を飲みながらも4回妊娠。だが3回流産して4回目、やっとのことで女の子を授かったのだ。

しかも出産までトラブルがあいついだ。検診のときに筋腫が2個見つかった。自覚症状がなかったが子宮が胎児とともに大きくなるにつれ筋腫も大きくなってくる。しかもできた場所も悪いらしく出産と同時に子宮ごと摘出することを医師がすすめる。

となると詩織たちには子供が1人しかできないことになる。啓太はそれでもいいと言った。子供だけじゃ人生ではないし、そのことも大切に育てよう、な。

お互いがよくわかっていないままに見合い結婚したようなもので結婚してからお互いのことがわかってきた。詩織は啓太は見てくれこそよくないものの、性格が穏やかでやさしいことに感謝していた。ふたりは結婚してから仲良くなったといっても良い。

出産と同時に子宮摘出のため詩織は通常出産の女性より10日ほど長く入院した。できた子供は女の子で体格も良く健康そのものだった。子宮がなくなったことは悲しいことだったが詩織は子供ができたことに感謝した。それこそ生まれてきてくれて、ありがとう、だった。

いや、いまでもそう思う。

生まれてきてくれた女の子に詩織達は鈴華と名付けた。出産後すぐに聞こえてきた赤ちゃんの泣き声がまるで鈴のなるような絶えな  
る音楽に聞こえたからだ。

待望の子供に両家の父母、義父母は狂喜した。お互い一人っ子同士  
の結婚だったから、余計にそうだったかもしれない。

鈴華はかわいい女の子だ。小さな手足、小さな目に小さなお口。片手で抱っこできる小さな赤ちゃんはすぐに大きな赤ちゃんになり、はいはいもし、すぐに歩けるようになった。

だが異変に気付いたのはやはり母親の詩織だった。呼びかけても振り返らない、振り返ってくれない。そういえばがらがらであやした時も目に入ったときは反応するが、遠くで音がした時の反応がにぶいような気がする……。検診では異常なしだったけど……。言葉がでてないけど喃語はあるしもう少ししたら出てくるから心配しないで、との保健婦さんの言葉を思い出す。

詩織はこの子はもしかしたら耳が悪いのかも。ベビーカーをおして駅前の耳鼻科に行く。鈴華10か月の時だった。医師はすぐに渗出性中耳炎という診断を下した。

「おかあさん、ちよつと来るのが遅かったね。鼓膜の中に膿がいつぱいたまっている。これじゃあ、赤ちゃんは聞こえないですよ。今から鼓膜切開をして膿を出すから。それと気長に薬をのまないといけないけれど、きつとなおりますよ。1週間に1度は通うように」

切開のときは鈴華は10か月の赤ちゃんと思えないくらいに暴れた。点耳薬で麻酔してもらったのに痛くて怖かったらしく帰宅後もぐずぐずと泣いていた。幸い薬を飲むのは嫌がらなかったが、ぐずぐずと機嫌が悪い鈴華に対して詩織は自分をせめた。

義母も「かわいそうに、そういえばしょっちゅうかぜをひかしていたし、詩織さん、赤ちゃんは言葉が言えない分母親が気をつけてあげないといけませんよ。ホントちゃんと見ていないと」とよけいに自己嫌悪にひたるようなことをいう。

実家の母も鈴華の耳鼻科通いを聞いて「中耳炎って気長に通わないといけないらしいし、なんでもっと早く気付いてあげなかったの？長いこと中耳炎に気付かなかったのはあんたの責任じゃないの。後遺症が残るとかわいそうよ、おお、鈴華ちゃん悪いママだよね」

薬飲まないといけませんよ」ママに忘れないようにいうのですよ」とさらに追い打ちをかける。

実の母と義理の母。子育てはお互いがしたはずなのに、かわいい孫が少しでもけがをしたり極端な話少しでもくしゃみをする二人して母親の詩織のせいにするのだ。確かに私が悪いけど、仕方ないじゃん」と詩織はふくれた。

夫の啓太だけが詩織を責めず「仕事休めたらばくも付いて行くよ、だから大丈夫だよ」となぐさめる。

詩織と鈴華は1年ほど耳鼻科に通ったが医師はもういいですよ、とは言ってくれない。膿を出す薬も継続のままだ。医師を変えたが治療法は変わらない。中耳炎は根気がある病気だということはわかった。しかもかぜをひきやすくひくたびに鼻水がでてずるずるになる。すると聞こえが悪くなるようなのだ。子育てにみんな苦労するとはいうものの、耳鼻科がよいがだんだん苦痛になってくる。予約をとってはいても1時間ぐらいは平気で診察が遅れる。詩織達がいるのは医師人口の少ない地方都市だ。どこの耳鼻科も老人や子供達で満員だ。

小児医療のおかげで治療費用は無料であつただけが救いだつた。鈴華は3歳になった。耳鼻科へは風邪をひかして鼻水が出たときには耳の中にも水がたまりやすくなるというのでその時は早めに受診するようにしている。言葉は出ているがまだ遅い。3語文がやっと、というぐらいか。こんな鈴華のためにも大勢の子供たちと一緒に過ごす時間が長いほうがいいだろう。4月から近くの幼稚園の年少組に入れることにした。時間に余裕ができたため詩織も短時間だがパートで働くことにした。お弁当会社の工場だ。時給は高くはないが家計の助けになるだろう。

幼稚園にあずけても季節は春だろうが夏であろうが鈴華はすぐに熱を出してすぐ迎えに来てください、の電話がかかってくる。しかも忙しい時間帯に決まってかかってくる。詩織は閉口したが幸い職

場のみんなに理解がありすぐに帰宅できるのはありがたかった。

園に入れて半年ほどたったある時、担任の若い先生が言いにくそうに詩織を別室に誘って言った。

「あのう、鈴華ちゃんだけと言葉は出ていても遅いようですし、あのう、耳鼻科で治療はされているのですよね？」

「ええ、今でも週1回通っています。薬も飲んでいます」

そこへ園長先生が入ってきて言葉をつなぐ。

「ええっと、私もはいろんなお子さんをみていますのでね、耳が悪いのは聞いていますが鈴華ちゃんはどうもそれだけではないようです。専門の機関を紹介しますので一度言ってみられたらいかがですか？」

詩織は何と言ってよいかわからない。

「耳が悪いだけではないって・・・おっしゃっている意味がわかりません。言葉は遅いけれど心配はいらないうって耳鼻科の先生も言ってくれるし、鈴華はいうこともちゃんと聞いてくれるし何を話すかこちらもわかるように話しますが」

「ええ、鈴華ちゃんは3歳にしては活発で利発なお子さんです。私達も鈴華ちゃんが大好きよ・・・ですから念のため、と」

詩織は園長先生があらかじめ書いてくれた紹介状と行き先が書かれた地図を受け取る。小児発達障害相談センター御中と書かれている字をくいいるように見つめる。

「先生方は、私の子に、私の子の頭に障害があるかも・・・と」

「いえいえ！そんなことはいっていませんよ。大丈夫ですから」

「でも発達障害、ここに書いてあるではないですか！失礼だわ！」

「鈴木さん落ち着いて、鈴華ちゃんはね、言葉が不明瞭なことが多いのでこちらで何を言いたいのかわからないときがあるのです。そのことでお友達にからかわれたりしてますしね、またかなりこだわりの強い傾向をみせる時がありますし、絶対聞こえているはずの場面でも聞こえていないときがあるのです。ですが単なる気分の起伏

の激しいお子さんだとは思いますが念のため、にということですよ」

「お友達にからかわれる・・・かなりこだわりが強い・・・ですか・・・」

ふいに詩織はあるシーンを思い出した。

確か、幼稚園に入る少し前の話だ。お天気の良い日にいつものように公園に連れて行った。すでに顔見知りの3、4人の子供たちが砂場遊びに夢中になっている。鈴華も歓声をあげて砂場に突進していった。子供たちが肩をよせあうようにして砂場遊びに熱中しているのをしばらく見る。つきそいのお母さんたちとも会釈して詩織は近くのベンチにすわった。

持っていた本に夢中になったときにふいに子供たちの笑い声が聞こえた。鈴華の笑い声も聞こえる。見ると鈴華をぐるりと3、4人の同じ年ぐらいの女の子がいる。いつものメンバーだが今日は様子が少し違う。先生、という声もする。学校ごっこ？だろうか。何を笑い合っているのだろうか。詩織は耳をそばだてた。

「違うでしょ！鈴華ちゃん違うって、さあ、もう1回言ってごらん」  
「てでび、てでび・・・」

「あははは、テレビでしょ、発音ホントへたですね、いけませんよ。さあ、もう1回」

「てでび・・・てでび・・・」

わあーっという笑い声。鈴華も笑っている。

「じゃ、違う言葉をしましょう。エレベーター！」

「えべれえたー」

「ちがう！」

「・・・えべれえたあー」

「あーはははは、鈴華ちゃんやっぱり変ですね、先生の言う通りにしないと学校へ行けませんよ」

「はい、先生」

「エレベーター」

「えべれえ・・・」

「違う！」

おつかぶせるようにやや背の高い女の子が言いなおす。鈴華は真剣な顔になっている。

「鈴華ちゃん、やっぱり耳が悪いんだ、かつわいそー、こんなんじや幼稚園にも行けませんよーだ」

詩織は思わず鈴華の方に向けよってきた。

「やめなさい！あんたちもういいでしょ！」

詩織の顔を見て女の子たちは黙った。鈴華はきよとした顔をしている。詩織は鈴華の手をとった。

「さ、もう帰りましょう」

鈴華は詩織の手を振り払っていやいやをした。

「やあだ、ママ。学校ごっこをしていたのに」

気がつくと公園にいる他の母親がこちらを見ている。砂場遊びの幼児までが立ち上がって詩織を見ている。

詩織は頭に血が上り、鈴華の手をひっぱったまま、家に帰った。

鈴華の言葉の遅さと稚拙さはよくわかっていた。が、こういう言葉遣いは今のうち、かえってかわいらしいじゃないか、という夫の言葉を信じていたので心配はしていなかった。

が、今日幼稚園に先生に呼ばれこの話である。発達障害、こだわりが強い・・・。同じ年頃の子供たちのからかいの対象にまでなるとは思わなかったのだ。

双方いじめの認識もなかったが今からこれでは先が思いやられると詩織は落ち込んだ。本人が気にしていないのが救いだが詩織はあせった。

またこだわりが強いといわれて普通ならば一人っ子で育てているので幼い子供はそういうものだと思っていた。言われてみれば、着替えの順番や色にこだわったりする。特に絵を描くとき・・・



鈴華は絵を描きはじめると自分で納得するまでずっと描き続ける。クレヨンを使って黙々と描き続ける。詩織は何かお皿洗いをしたいときとか、自分の髪をゆっくり洗いたいとき等、一人で何かに熱中してくれるのはすごく有り難かった。なので、いつも安い大き目の画用紙を買いだめていて家にはかささず置いてある。クレヨンもすぐ小さくなるので100円ショップのものを何種類もある。色鉛筆やマジックも揃えていた。鈴華の描く絵は稚拙だが色使いが綺麗だ。いつも赤とピンクが必ずメインで入り鮮やかな配色だ。何を描いているかは説明してもらわないとわからないがたいていクマさんがお買い物してる、とかウサギがご飯をたべているところ、とか言う。

ただ鈴華が納得しないと1枚の絵がきちんと仕上がらないのだ。こだわりが強いなと感じるのはそのことか、と思う。色が気に入らないとかクマの顔が気に入らない。するともうこの画用紙はいらない！とぐちゃぐちゃにして捨ててしまう。天才気質かなあ、と啓太も書き損じの画用紙を見て閉口したぐらいだった。

詩織は鈴華の手をひいて封筒をにぎりしめて帰宅する。心の中の思いは乱れていた。

鈴華、かわいそうに！きつと赤ちゃんの時から耳を悪くしたので今頃影響がでたのかも。せめて言葉づかいをなおさねば！

その日から特訓がはじまった。

ご飯の時、おやつするとき、お風呂のとき、トイレのとき……。

「いただきます、は？」

「いただきます」

「いただきます、よ」

「いたらかき……」

「違う！」

いらいらした詩織は食卓をばんとたたく。鈴華は悲しそうな顔をする。啓太はそんなにきついいい方をしなくても、という。まったく啓太ののんびりやにはあきれる。幼稚園での話をするとなんかの思ひすごしだろうという。まだ小さい幼稚園児じゃないか。まだ入

園したばかりなのに先生がバカなんだろう。舌足らずな発音はかわいらしい、気にすることはない。大きくなったら治るよ。啓太は鈴華がかわいいのだ。

詩織は啓太のおおらかさにあきれ自分で鈴華をしつかり育てなくては。でないと小学校でいじめられたりしたらどうするというのだ。

「鈴華、これはなに？」

「ヤワー・・・」

「シ、ヤ、ワー、シャワーよ」

「ヤワー」

「もうっ」

鈴華は悲しそうな顔だ。詩織も悲しかった。でも鈴華はできるはず。だってこの子はおむつをはずしたのも早かったし、きつときつと賢いはず。

発達障害センターへ電話をし診察と知能検査の予約が取れたのは2週間後だった。家での発音の特訓の甲斐あって少しはましになっただろうか。ただ鈴華があまりにしつこく発音を治すと癩癩をおこしてカーテンの後ろにかくれて出てこなくなるのにはまいった。

「いや、もうママきらい。どうせ私はだめなんですよ、へんなんですよ」

このきらい、という言葉も良く聞くと「きやい」と聞こえる。これではだめだ。

「これは鈴華ちゃんのためよ、ママが怒るのはみんな鈴華ちゃんのためなのよ」

「いや、ママきやい、ママこわい・・・」

「鈴華！」

詩織の心の中は鈴華の将来を危惧する思いでいっぱいだった。せつかくここまで大きくしたのに、いじめなんかにあつたらかわいそうだ・・・言葉は長く繰り返し返させるとちゃんと綺麗に発音できるじゃないか・・・発達障害なんて絶対にはいはずだ・・・でももし

かしたら、という思いがどうしても消えず、詩織は悲しかった。

2人はこういう状態で発達障害センターで知能検査を受けたのだった。

検査をしてくれたのは大島という年配の女性だった。白衣を着てはいるが柔らかい物腰で子供への対応も慣れているようだった。知能検査の間は詩織は別室にいてマジックミラーでその様子が見れた。

## 詩織の画用紙ある聴覚性LDの女の子の親の話・中編

マジックミラーはこちらから部屋の様子はわかるがあちらからは見えない。

鈴華からは私の姿は見えないのだ。親の姿が見えなくとも鈴華はまったく平気な様子だ。初対面の検査技師の大島に人懐こく声をかけていた。大島も手慣れた様子で検査をすすめていく。詩織はマジックミラー越しに鈴華と大島の間の机の上にあるものをじっくり見る。確かテスト前に「ウイスク」というテストをすると簡単な説明があった。知能検査にはいろいろな種類がありやり方や試験官によっては微妙に差がつくという説明も受けた。質問はあとでゆっくり受け付けます、検査には約2時間かかりますが、どこかで時間をつぶれさせてもいいし、こちらで見学もできます。ただ鈴華ちゃんの目の届かないお部屋で見えていただきます。詩織はもちろん見学すると即答した。

すると細長い小さな小部屋に通された。小さな折りたたみ椅子に詩織は腰掛ける。これまた小さな窓、これがマジックミラーなるものか、部屋の様子がわかる窓がついている。鈴華のいる部屋からはこの窓は鏡に見えるらしい。鈴華は大島が気に入ったのか手をつないではしゃぎながら椅子にすわった。特に緊張している様子もない。また障害がある子供のようにもまったく見えない。

下の階にはこのセンターで教育と言うのか療育と言うのかかわらないが何か授業を受けているらしい子供とその親がいた。あきらかに自閉症、もしくはダウン症児らしい子供も見かけた。みな礼儀正しく詩織親子を見かけて「おはようございます！」と言ってくれた。詩織は緊張していたがこの子供らの笑顔でほっとした気分になった。この発達障害センターは敵地に入る心地だったのが一気に緊張が緩んだ。もとより何も頓着しない鈴華は「おっはよーっ」と声をかけている。

「ママ、ここおもしろーい、ここおもしろいおもちゃがいっぱいあるの、おもしろい絵もいっぱいあるの」

鈴華は上機嫌だ。詩織も心が晴れたがいざなにもないマジックルームに椅子だけの小部屋にいと胸がつまった。

「さあ、鈴華に発達障害があるかよく見せてもらおうじゃないの・・。なにもなければその結果を幼稚園長に見せて、それで終わりのはず」

だが終わりではなかった。始まりだったのだ。

1冊の本があり、めくつていくと絵本のような。ただし何か欠落もしくは不足しているイラスト絵本。

「さあこれはクイズよ、鈴華ちゃん、この絵に何かおかしいことはない？」

鈴華は目を細めてじつと絵を見つめる。詩織も身を乗り出してみる。足が3本しかない犬だ。鈴華は足が1本少ない！と誇らしげに叫んだ。大島は微笑む。

「そのとおり！じゃ、これは？」

「自動車のタイヤが1個すくない！

自転車ひもがない！」

めくるスピードははやかっただがだんだん言葉がにぶる。難しくなってきたのだ。

ドアのちようつがいがないドアのイラストで鈴華はもう嫌気がさしたようだ。

「もうあきた。嫌だコレ・・」

大島は黙ってそばにあった用紙に何かを描きこむとじゃあ、別のをしようかと誘った。

そっぽを向いていた鈴華は大島に向き直る

「先生のこれから言う言葉を繰り返してね。じゃあ、ねこといぬ！」  
「かんだーん、ねこといぬ！」

簡単だな、と詩織も思った。だがそうではなかった。だんだんと

文章が長くなる。

「つくえのうえのおにんぎょうとボール」

「えっと、つくえのうえ・・・ボール・・・」

「この公園に滑り台とぶらんこがある」

「公園・・・すべり、らい？・・・」

「女の子が赤いブラウスに黒いスカートを」

「おんなのこ・・・赤・・・」

鈴華はまた嫌気がさしたようだ。椅子から立ち上がり窓の方へ向く。大島は「まだ終わってないよ、じゃ次はこれね」

そうしてイラストの通りに線で絵と絵をつないだり、パズルを使って色を指定通りに組み合わせたりした。

いずれも簡単にできたものから難しいものがある。

詩織はずっと固唾をのんで鈴華の様子を見ていた。4歳の子供には難しい課題ではないかとも思ったが鈴華がこんなに根気がないとはいえなかったのだ。特に興味を失うとひっくりかえったり、先生が止めるのもきかずに部屋を出ようとしたりする。家ではこんなことはなかったわ、やっぱりここは初めてきた場所だし慣れてないからね、多少成績が悪くても大丈夫のはず・・・。

大島が終わりました、とマジックミラーの部屋をノックした時、詩織は時計を見てはじめてもう2時間たったのかと驚いた。

「疲れたでしょう。鈴華ちゃんの下プレイルームで他の教室の子と一緒におやつを食べています。お母さん、もう少し時間いいでしょうか？」

「ええ、もちろんです。鈴華はどうですか？結果をぜひ聞かせてください」

「これから言うことはおそらくそうであろうということです。正確かつ詳細な診断表は私の記録と見解を医師に確認していただいた上で郵送で送付いたします」

「ええ、ええ、わかりました。それで・・・」

大島は小さな小部屋に詩織を招き入れ向き直ると自分の眼鏡をきちんとかけなおした。

「まず、えつと結論からいいますね、鈴華ちゃんは知能指数は4歳のお子さんにしては全くの正常範囲にあります。ですが、軽いけれどLDのようですね。お母様が気にされている発音は耳の治療をしている限りいずれはなおると思いますよ。LDと発音の心配はこのさい切り離してお考えくださいね」

「エル・ディー、ですか・・・」

「はい、LDです。LEARNING DISABILITY、のことです。学習障害って言葉を聞かれたことはおありですか」「英語はわかりませんが、学習障害ならテレビで聞いたことがあるような気がします」

「簡単にいえば知能的には全く問題ないが、学力を学ぶときに習得に時間がかかる場合が多い、ということですよ」

詩織には簡単にいえば、といわれてもわからなかった。大島は言葉を選びながらわかりやすく話してくれた。

「算数が100点でも国語が0点。逆に国語が100点でも算数が0点の子供ってよくいるんですよ」

そういわれてああ、と思うことがあった。テレビで聞いたことがあるような気がする。

大島はイラストが描かれたパンフレットを用意してくれている。

「いいですか、どうか悲観なさらずに。LDといわれてもようは人それぞれです。古くはエジソン、この人はご存じの通りの発明の天才ですが幼いころは産みの母親から知的障害があると思われていました。またアインシュタイン、この人は失語症でした。また有名な俳優さんでもLDのため英語が読めず台詞を覚えるのに苦労されたりしています。結構多いんですよ」

「知的障害や失語症といわれても・・・」

「鈴華ちゃんは総合的に診て聴覚性のLDだと思われます」

「聴覚性LD・・・」

「そうです。聞こえているけど、何を言っているかわからない、理解できないのです。心当たりないですか？幼稚園の紹介状には聞こえているはずが聞こえない、先生の言う言葉が理解できない傾向があると描かれています。確かにこだわりがやや強い傾向はありますが、かろうじて正常範囲内、これは大丈夫でしょう」

「聴覚性LD・・・」

詩織は繰り返すだけだった。実際なんといってよいかわからなかったのだ。

「耳は耳鼻科での話をうかがう限りはまた別の話ですね。滲出性中耳炎の影響と考えられている節がありますが、ここは切り離してください。鈴華ちゃんは言葉はちゃんと聞きとれるけど言葉の意味がわからなかったり、意味をはきちがえて聞いてしまうのですよ。今はわからないけど小学校へ行って団体行動を取るようになってはじめてわかるお子さんの方が多いですから」

大島はまるで早めにわかってよかったですね、と言いたいように取れた。それは詩織にとってはつらいことで意地悪い見方をしても仕方がないと思った。まだどういってよいかわからない。知能は正常で聞こえているけど理解できないというのがわからないのだ。どうしてよいかわからなかった。啓太と一緒に行けばよかった、と詩織は後悔した。黙り込んだ詩織に大島は「何かご質問は・・・」と聞いた。詩織は顔をあげた。啓太なら詩織よりはきちんとした質問ができただろうに・・・とにかく質問をしないといけない。

「・・・それでそのLDという障害にどういう治療がなされるのですか？いつ頃治るのですか？」

大島は優しく微笑んだ。詩織は大島の顔をじっと見た。きっとこの質問はどの親もするに違いない。我が子の障害はどういう治療をしていつ頃治るのか、と。

「LDはその子の個性の1つという見方をしてください。治療ではなく、療育をします。要は訓練次第でしょう。また無理強いはい



しません。この場合療育手帳は不要です。またこれなら小学校の普通学級だっていけると思いますよ」

それから大島はいろいろと説明はしてくれたが詩織はよく覚えてない。おまけにどうやって帰ったかも覚えていない。かろうじて電車のホームで鈴華がはしゃいでいるのをたしなめても聞いてくれず強く腕をひっぱったのを覚えているぐらいだ・・・。

## 詩織の画用紙ある聴覚性LDの女の子の親の話・後編

こうして詩織と鈴華は発達障害センターへ週1回、療育へ通うことになった。

詩織は鈴華の将来を悲観したがそれは最初のうちだけで、センターへ行くことでまた別の世界が見えてくる。LDのみならずADHDもいる。一口にLDといってもいろいろな種類があるし、ADHDでも自閉症とひとくくりにできない個性もある。またいろいろなダウン症児もいる。

でもみんなかわいい子供だ。本当に子供ってなんてかわいいのだろう。

詩織と啓太の夫婦はLDの診断を受けてから家のパソコンで情報を収集し図書館で本を借りて勉強を重ねた。そして鈴華の障害に理解をするつもりだ。割り切れない思いもあるがでも理解しないといけない。LDは脳の障害の一部で治らないのだ。しかしそれがなんだろう。私達のかわいい子供に違いはないし、普通ってなんだろうと考えるのだ。

勉強してみるとなるほど鈴華は立派なLDだろう。大島先生の診断は間違いであってほしかったが、早くわかってよかったと考えるようにした。LD・来年は小学校だ。大丈夫だろうか。療育へ通って一年半になるが効果はあったのか。

幼稚園では注意力散漫な傾向は見えてもずいぶんと矯正というか自制がきくようになったと言われた。効果はあったらしい、と思いたい。どんな傾向があっても私のかわいい娘には違いない。鈴華は私達夫婦のかけがえのない愛しい子供だ。

ただ世間的にはどうなのだろう。療育の通わせている親は話してみると全員将来に不安をもっている。軽いLDといわれた鈴華ですら義父母にそんなはずはない、うちの家系にはそんな障害がある人はいないし、何かの間違いだとはつきりいわれた。特に義母は拒否

反応がすごく一度遊びに行つた折何かで鈴華が癇癩をおこしたりすると「鈴華ちゃんもう大きくなつたでしょ。そんなんだから療育へ行つてゐるのよ、あほみたいに思われるよ」といつて詩織が逆上したことがあつた。

「鈴華をそんなふうに言わないで！ひどいです！」

義母はあやまってくれたが、これからも他の人からもうこういう中傷があるかもしれない、私がしっかりしないといけないと心を強くもつのであつた。

またどこからかめれたのか幼稚園の帰りに週1回の割合で療育へ通う詩織親子に

「LDですってね、発音が多少おかしくともでももつとひどい子もいるし、気にすることないわよ」とあけすけにいつてくる親もいた。発音の件で耳が悪いことと聴覚性LDをこつちやにされていると思ひながら自分もそうだったんだし、とあいまいにうなづくだけだった。療育に通わせている親はせめて未就学時の間は健常児（こういういい方もいやらしいが）と一緒にいさせたいと何かの親子の集まりに理解を求めて我が子の特徴や対応を説明したつわものもいたが詩織には自分の性格上それはできないと思つた。

でも園児同志は屈託がなく鈴華は幼稚園には一度も行きたくないと言わず喜んで通つていた。

小学校はどうだろうか、普通学級でいいかも、鈴華は私よりもしっかりしてゐて大丈夫とは思ふけれど。思ひは堂々巡りをし、療育にかかわる費用を負担する（この地域では1割負担）保険証に「障害者児童名・鈴木鈴華」とはつきり印刷された文字を見つめるのだ・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

なれてみると療育は楽しかった。また他の障害を持つ親子にふれあい親しんでみると子供には本当に個性と言うか違いが大きいと思われた。

ここでの療育は5人で1クラスだ。同じ年で1かたまりの構成だ。一コマの授業で一時間ずつ。1つのクラスに先生が3人ずつついている。鈴華のクラスには鈴華のようなLDが2人、あとはADHDだったりLDの混合だったりした。鈴華をのぞいて全員が男の子だ。療育と言ってもやっていることは基本的に幼稚園でやっている遊びの延長だ。

まず課題をする。あいさつ、礼儀、そしてじつと立って人の話をきいたり、自分で何かの説明をしたり。そして歌を歌ったり楽器を使ったりする。また絵を描くことも多い。鈴華のクラスは幼稚園児ばかりだがもつと遅い時間から始まるクラスには小学生高学年の子供もいるという。大きい子のクラスはのぞいたことはないが、勉強も見てもらえるのかどうか。

詩織はきちんとまじめに週1回の療育に通った。療育中は隣の小部屋のマジックミラーで見学できる。そのあと希望すれば先生との面談も自由だ。鈴華はクラスになじむのは早かった。人見知りしない性格はありがたかった。そのうちに親の詩織も慣れてきて親しくなった親もいる。一番よくしゃべるようになったのは、同じ療育クラスの立田桃夫の母親だ。桃夫はクラスでは一番重症とおもわれるADHDだがその母親は意に介さずいつでもマイペースをくずさない。背が高くモデルといっても通るぐらいの美人だ。いつ見ても垢ぬけた服装をしている。

彼女は詩織よりは3つほど若かったが詩織よりずっと気が強くしつかりしていて、桃夫には良い教育を受けさせたい、と常々言っていた。小学校はどうするのかと聞くと当然のように小学校の普通学校へ行くと答えた。それを聞いて詩織は意外に思った。というのは

桃夫も母親そっくりの容姿でかわいらしかったが、療育で見学していてもこのままでは小学校へは行けないと思う行動が多かったからだ。

桃夫は5分といや、1分でもじつとしていられずしょっちゅう動き回る多動がひどかった。しょっちゅう先生の髪や身体をさわりにいたりして、注意されても泣きもせず怒りもせずマイペースをくずさない。コミュニケーションを取るどころか団体行動がまったくできなかった。別の補助の先生が足の形をしたマットを持ってきて動き始めた桃夫の後ろをついてまわる。マットの上に「どうぞ」とのせると足の形にそうように桃夫は5秒ほどじつとできるのだ。この療育クラスの桃夫以外は鈴華のように大人しい子が大半だったので桃夫の行動は目立った。

小学校の普通学級は無理ではないか、鈴華でさえ行けるかどうか心配している状態なのに・・

が、桃夫の母親は詩織ほどは心配していない。

「私の子はそれほどひどくはないと思うわ。しっかりしているし、字も覚えるのが早かったのよ。もう掛け算の九九も言える。ただ多動がひどいのは認めるけど勉強面では遅れはないはずよ。大丈夫だとおもうのよ。鈴木さんも大丈夫よ。同じ校区だし同じクラスになる可能性も大きいわね。がんばりましょうよ」

とあでやかに笑う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

やがて小学校へ入学。

生まれてから6年目。ああ、子供の成長は何と早いことか。

詩織は啓太と一緒に入学式に臨んだ。悩んだが熟考の末普通学級

にした。大島の助言も大きかった。

クラス構成は30人。幼稚園で一番の仲良しだった穂波ちゃんも一緒に鈴華のためにほっとした。また立田桃夫も一緒だった。入学式で桃夫がみんなが静かに座っているのにぐるぐるまわったりする奇異な行動は目立ったが、鈴華の方は最初から最後まで大人しく椅子にすわって先生の話を聞いていてほっとした。

穂波ちゃんの母親には鈴華の耳が少し悪いこと、そのために発音が変わること、LDの事も言っている。

「大丈夫よ、鈴華ちゃんはおとなしくて本当に女の子らしい子じゃないの。耳のことはうちの穂波にも気遣うようにいつてあるし、クラスともすぐなじむわよ」と言ってくれた。

また担任の皆見先生にもねんごろに挨拶はしてある。まだ20代の年若い先生だ。

「センターにも見学に行ったりして多少の知識はありますので、どうぞご心配なく」

と協力的だった。同じ療育クラスの子には別の校区だったがひまわりクラスという発達障害クラスへ行った子供もいる。

その親からは「いじめが心配だから、もう学歴とかうち、ADHDの診断をもらってから考えないようにしているし、1日1日が笑って暮らせたらいいから、もう障害児クラスでいいわ」という言葉を聞いた。

鈴華が普通学級へ行くとわかると「鈴華ちゃんは女の子だしね、大人しいし大丈夫でしょう、でもあの桃夫くんは、あの親は普通学級へ行って当然のつもりみたいね」・教育委員会での勧告も断つたらしいし、大丈夫かしらね」という。そこへ桃夫の母親が「聞いたわよ、余計なお世話よ!」と割り込んで喧嘩になったりもした。その親は桃夫の母親とは普段からそりがあわないらしく、療育で桃夫の多動のせいで先生の時間が取られてうちの子にさかれる時間が少ないと応戦して大変な騒ぎになった。詩織があわてて止めたが

双方の母親たちの気の強さに驚嘆した。

これならこれからさき桃夫達にどんなトラブルがおころうともこの母親が立ちまわってうまくいくだろう。私にはできないと、ちゃんと鈴華の母親らしくできるのかと思い悩むのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

鈴華は小学校を楽しみにしていざ入学したら毎日喜んで通っていた・・。給食もおいしいという。穂波ちゃんがやさしくしているし、おしゃべりする女の子もたくさんいるし、と学校から帰ったらおやつをほうばりながら詩織に説明してくれる。

が、1カ月もしないうちに鈴華は通学を嫌がるようになった・・。夜いきなり起きだして泣きだすことが2、3回あった。そのあとはぐったりとして寝ている。朝起きると元気がない。問い詰めると別にいじめられているわけでもなさそうだ。宿題ノートが真っ白だったりする。小学校1年生ならこくごやさんすうは今これからの勉強に一番大事な基本の基本をしているはずだ。真っ白でいいはずがない。詩織はさすがにおかしいと思った。

ある日、連絡帳に先生の字で「せんせいのことについていつもちゅういしてききましょう」とノートいっぱい大きな字で書かれている。

鈴華にどういことが聞いたが「先生の言うことがわからないの、」というばかりで、何度もどうして先生がこれを書いてくるのか聞くとうとう癪癪をおこした。

「だって、ママ、先生の言うこと、聞こえても、わからないもんっ！！」

その夜もいきなり起きて立ったまま大声で泣いた。啓太と詩織は鈴華を抱いておろおろとするばかりだった。

翌朝、鈴華の様子を見てただごとではないと感じて啓太と相談して鈴華を見送った後に学校に電話することにした。電話は啓太が出勤の時間を遅らせてしてくれた。

担任の皆見先生を呼びだす。鈴華の家庭での様子を聞かせた。皆見の方も学校での様子を教えてくれた。

「鈴華ちゃんとはとてもおとなしい良い子です。ただ呼びかけに返事しない、気が向くと返事してくれるという感じで仲のよいお友達を何人が怒らせてしまったようです。また授業ではじっとしてはいますがぼうつとしているので再三ちゃんとこつちを向いてと注意しています。知能は普通ということなので普通の指導をしています。・クラス内には自閉症の他、家庭的に問題のあるお子さんが多いので鈴華ちゃんまで手がまわらないのです・・・」

啓太は鈴華の聴覚性LDのことを本当に理解してくれているのかと思った。入学前に皆見には会って大島の所見も検査結果も見せてある。クラス運営が大変なのはわかるが鈴華の様子を見てこれではいけないとは思わないのか。親がどう思うでこういう電話をかけるのか理解してはくれないのか。

皆見はしばらく電話口で黙り込んだ後、こういった。

「では私も時間のある折には、そうね、お昼休みでも鈴華ちゃんと向き合って教えてみますわ。ゆっくりしゃべれば理解できるのはわかっていますし、授業中は鈴華ちゃんだけのためにゆっくりの口調で教えるのは無理なので折々に見ていきます。しばらくお時間をいただけたらうれしいです」

啓太はそれで了解し、見えない相手に向かって「お願いします」と頭を下げたのだ。詩織もそれで納得するしかなかった。

啓太は電話を置いた後、出勤した。玄関で詩織の肩に手をやり「ま、なんとかなるさ。ぼくはねちゃんと調べたさ。小学校へ行くだけが子供の義務じゃない。いざとなれば校区を変えてひまわり学級へ行けばいいし。それでもだめだったらLDだけの学校もある。鈴華が生気を失って死んだような子になるぐらいなら、家にいたって



いいさ。学校だけが人生じゃないだろう。鈴華はまだ小さい。ぼくら親がしっかりしないと本当にだめになってしまう。夜中に泣きだすのは鈴華なりの訴えだろう。ぼくたちのあんなにかわいい子供がだめになってしまう。親としてはできるだけのことでしょう。今日の電話が無駄だとわかったらわかったでよい。何か良い方法を考えような」

詩織は涙ぐんだ。まったく啓太ののんきさが有り難かった。学校へは行かないといけないとは思うがなんとかなるさの考えでほっとしたのだ。

啓太を見送り詩織は空を見上げる。五月晴れで空が抜けるように青い。今日も晴天だ。鈴華も今頃は学校の運動場で空を見上げているだろうか、それとももう授業中で青い空が見える教室でがんばっているだろうか。

鈴華、ママは応援しているからね！がんばって！

小学校、楽しんでね！

今日は図工があるよ、鈴華の得意な図工だよ。画用紙いっぱい絵を描いてね。上手に描けたらママにも見せてちょうだいね！

鈴華、ママはあなたが大好きよ！

## 鈴華のクレヨンがある聴覚性LDの女の子自身の話

鈴木鈴華は萌木小学校1年生になったばかり。おばあちゃんに買ってもらった赤のランドセルに色とりどりの教科書、新品の鉛筆がそろったピンクの筆箱、下敷き、ぴかぴかの制服。どれもみんなお気に入りだ。

もう幼稚園じゃない、小学生なんだ。

もう大きくなったんだ。

入学式の次の日から勉強が始まる。幼稚園のように朝のあいさつをしてからお昼の給食の時間まで運動場であそんだり外へ散歩することはもうないのだ。鈴華はお勉強も楽しみだった。私はもうひらがなもかけるし数字だって20までならわかるもん。お母さんは私のことをとても賢い子だっていつもいつてくれるもん。ああ、勉強の時間が楽しみ！鈴華は机の上でもらった新しい教科書をぱらぱらとめくる。ふいに肩をたたかれた。

「さつきから何度も先生が呼んでたのに、こっちきて」

幼稚園で一緒だった穂波ちゃんだ。鈴華の手をひっぱって先生のところへ誘導してくれる。

「うん、ごめん」

皆見先生は黙って鈴華を見ていた。鈴華はすくつと立って先生の方へ行く。

「先生、ごめんね。聞こえなかったの。何の御用ですか？」

皆見先生は鈴華の方へかがんで耳元に口をよせてはつきりとした声で言う。

「教科書は机の中に、プリントを入れるファイルを出してね、と言ったの」

「はい、わかりました」

鈴華はすぐに先生の言うとおりにしたつもりだった。

「鈴木さん、ファイルは？」

「あつ」

「先生の言うこと、ちゃんと聞いてね。お願いよ」

皆見先生はにっこりとほほ笑みながら鈴華の机に近寄り、引き出しの中から黄色いファイルを取ってやる。

「うがー！」

いきなり隣の男の子が自分の机を蹴っ飛ばして廊下を飛び出した。  
「立田くん！」

あの子は確かどこかで会った子だ。テレビで歌を歌って踊っていたそうになかつこいい顔の男の子。唇が真っ赤で女の子みたいな顔。きれいな顔だ。どこで会ったのだろう。よく覚えていない。なんで急に飛び出したのだろう。

みんなはがやがやと騒いだ。皆見先生は静かにしていてね、というと桃夫を確保すべく運動場にかけていった。

次の時間も勉強だ。しかも国語だ。鈴華は楽しみだった。が、じつとすわっているのが苦痛だった。先生は何かをしゃべっている。何かを黒板に書いている。私もそれやってみたい。白いチョークで何かを描いてみたい。でも勝手に席を立てはいけないの。だって勉強の時間だから。ママがそういつていた。勝手に教室の廊下にもでてはいけない。それは療育の先生も言っていた。もう小学校に行くようになったからしてはいけないこともわかるでしょ？って言われたの。うん、私はわかってるわ。じつとしているのがいい子なの。

でもね、私の足が勝手に動くの。困ったな。窓に目を向けると桜の花がまだ咲いていてでも散っているのも多くてピンクがまるで海の波のようにうねっている。きれい・・・あっちの方へ行きたいな・・・鈴華はぼうつとしていたらしい。また後ろの席に座っている穂波ちゃんが肩をたたく。先生が本の方を見てっいてるよ！

鈴華はあわてて本を見たが先生が何かしゃべっていても何をいつているのか、さっぱりわからなかった。かろうじて前のページは、

とかこつちの文字はとかいつているのはわかるが何を言いたいのか全然わからなかった。声は聞こえる。でも言っていることがわからない。こういうのって幼稚園でもあったなあ。先生の言うことがわからなくてお友達に笑われたりしたっけ。小学校になったもこれは同じなんだ。私はやっぱりわからないんだ。鈴華はがっかりした。

「・・・なんだ、小学校の勉強つてつまんないの・・・」

さっきからがこん、がたん、がこんという音が聞こえる。音が大きくなってきたので振り返るとまたさっきの男の子だ。椅子を斜めにうかせてはがたと床におとし、また斜めに浮かせては床におとしている。がこん、がたん、がこん、がたん。

「立田くん、やめましようね。みんなじつと座って勉強しているのよ、さあ君もちゃんと座って・・・」

皆見先生が何か注意している。他の友達も騒ぎ始めた。おもしろそうだな、鈴華もすわっている椅子を少しだけ前半分を浮かせる。

ぐらとして天井が斜めに見えた。そして一気にがたん！あ、となりの子もはじめた。前の子も、その後ろの子も。あーははは、楽しくなってきた。皆見先生が大きい声で何度も静かにするように言った。

やがてみな、静かになった。先生の困った顔に気付いて鈴華もだまって座りなおした。ママの言葉もまた思い出したのだ。小学生になっただけでとすわって先生のお話をきくこともとても大事な勉強だと、そう言っていたから。ママは何度も何度も同じことを言う。私が小学校でちゃんとやっていけるか心配だと何度も言っていた。うん、だいじようだよ。さっきはちよつと自信をなくしたけど。大好きなママ。私はちゃんとやってるでしょ。

次の時間は算数だった。おはじきの数を数えるのがおもしろかった。これはちゃんとできたよ。ここはチャイムの音でお勉強の内容がかわったりするのだ。いくつかのお勉強がおわると給食だ。嫌いなものもたくさんでるけどがんばって食べる。そして大好きなものができただけ早く食べておかわりをもらってこれはゆっくり食べたりする。

それから給食になって、うん、私の大好きなメニューだった。全部食べられたよ。みんながやるところをよく見てから動いたので変なことにはならなかった。皆見先生もきれいに食べたねーとほめてくれたの。うれしかった。先生がやっと私をほめてくれたの。大きな声で話してくれるし先生のことが大好きになったの。

それからおそうじの時間で帰りの会をしてさようならを言うの。帰ってくると玄関にはもうママが待っていたのでびっくりした。ママの心配そうな顔したら、！

「鈴華、大丈夫だった？学校、楽しかった？先生の言うことわかった？給食どうだった？」

ママは質問攻めだったけど、本当に大丈夫だよ、楽しかったというと安心した顔をした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

学校はまあまあ大好き、でもだんだんとお勉強の時間がしんどくなってきた。困ったな。先生も困ってる。私は先生の言うことがわからないことがある。それからお友達のいうこともわからないことがある。それで変なことをいって笑われるの。ちょっと恥ずかしい。だからあんまりしゃべらないようにしようと思うの。

クラスで一番うるさいのはやっぱり立田桃夫くん。どこであつたのだろう、でも立田くんも私を見て知らん顔だからきつと気のせいだろう。皆見先生は立田君が椅子を蹴飛ばして運動場にいつても何も注意しなくなった。国語と算数とせいかつの時間に「かはい」という先生が立田君のそばにいてページをめくったり騒ぎだすと落

でも立田君は図工がとても得意。あつというまに綺麗な絵を書いたりする。18色入りのクレヨンや36色入りの色鉛筆をもっているの。それで綺麗な色をたくさん使つて細かく細かく書き込むの。絵が出来上がるとみんなが立田君の周りを囲んで見に行くの。本当にじょうずなんだよ！まるで魔法みたいにいろんな絵を描くの。この時間だけは立田君は静かじゃべらない。いつまでもいつまでも絵を描いている。絵は私も大好き。立田君ほどじょうずじゃないけれど、でも楽しいの。図工の時間はみんな何をいつているのか聞いたりしなくても何をしているかがわかるもん、音楽もいいなあ。大きな声で歌うのはとても楽しい。

でも国語はあんまりすきじゃない。右も左も私にはわからない。先生が「し」という字はこっちの方にはねるのよ、と何度も教えてくれたけど、その時はわかるけどでもまた新しい「し」を書くところの方からなくなるの。

「し」も「て」も「く」もどっちが正しいの。どっち向きが正しいの。私にはわからない。でもどっちむいていても「し」も「て」も「く」も読めるじゃん。なんでこっちの方に書いてとかいうの？ 算数もだんだんとわからなくなってきた。わからない。手の指を2つたてるとなんで数字の「2」になるの。それはひとさしゆびでしょ。ひとさしゆびを立てるとなんで「1」になるの。どうしてなの。どういう意味があるの。なんで一緒だというの。違うじゃないの。私にはわからない。でもわからないっていうとみんなわらうの。皆見先生もこのあいだ笑ったの。私は先生に笑われてくやしかったよ・・。

1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7
8	8
9	9
10	10
11	11
12	12
13	13
14	14
15	15
16	16
17	17
18	18
19	19
20	20
21	21
22	22
23	23
24	24
25	25
26	26
27	27
28	28
29	29
30	30
31	31
32	32
33	33
34	34
35	35
36	36
37	37
38	38
39	39
40	40
41	41
42	42
43	43
44	44
45	45
46	46
47	47
48	48
49	49
50	50
51	51
52	52
53	53
54	54
55	55
56	56
57	57
58	58
59	59
60	60
61	61
62	62
63	63
64	64
65	65
66	66
67	67
68	68
69	69
70	70
71	71
72	72
73	73
74	74
75	75
76	76
77	77
78	78
79	79
80	80
81	81
82	82
83	83
84	84
85	85
86	86
87	87
88	88
89	89
90	90
91	91
92	92
93	93
94	94
95	95
96	96
97	97
98	98
99	99
100	100

29

つも怒るようになっていく。立田君と私が嫌いみたいだ。立田君ほどじゃないけど、私も勉強がわからないし、先生の声が聞こえても何を言っているかわからないし。先生は困った顔と怒った顔しか見せてくれないようになってしまった。そして穂波ちゃんもだんだん先生がこうつてくるよ、とかこれしなさいっていつてくるよって教えてくれないようになってきたの。「鈴華ちゃんにいちいち教えるのもうあきちゃった。何度も同じこといつても忘れてしまうし、もういやだー」とか言われて悲しかった。

皆見先生、私最初は大好きだと思ってたのよ。でも最近笑ってくなくなってきたね。優しい顔じゃなくなってきたね。笑う顔も好きじゃなくなってきた。だって私を大好きな笑い顔じゃないもん。きれいな笑い顔じゃないもん。クラスのお友達の顔もだんだん好きじゃなくなってきた。だって私のこと笑うもん。立田君と私はクラスの嫌われ者なの。私悲しいの。それで夜眠れなくなってきたの。ママが心配している。夜中、私起きて泣くんだって。でも私夜中に泣いたっていわれても覚えてないの。夜中に起きて泣いたこと、本当に全然覚えてないの。今朝も朝起きたらママが疲れた顔でおはよう、という。今日学校へ行ける？ときく。

行けなきゃいけないでしょ。子供は学校へ行かないといけないでしょ。大丈夫だよ、ママ、私学校へ行けるよ。そういうとママはほっとしてやっぱり子供は学校へ行くのが仕事だからね、もうちょつとしたら学校も楽しくなるよ、友達もできるよという。私はお友達を作るのヘタだしもうムリ、と思ったけど黙ってうなづく。それで朝ごはんを食べて支度をして学校へ行くの。

でもね、今日も笛を忘れてきちゃった。ママは毎日私の連絡帳を見て玄関にランドセルと持っていくものを用意してくれる。でも笛、細長いから玄関に置いたまま忘れちゃった……。先生にあればいいっておいたのに、と怒られちゃった。先生が後ろの黒板に行った時男のたちから「すずかのばーか」と言われて悲しかった。それから

前の席とその前の席の女の子が私を見て笑ったの。

でも穂波ちゃんが「鈴華ちゃんは今聞こえなかったんだよ、笑っちゃかいそうだよ」と言ってくれたからうれしかった。私をかばってくれるのは久しぶりだった。それで前みたいに一緒に遊ぼうと思ったら「今チャイムが鳴ったのもわからなかった？今からお勉強の時間でしょ、」と言われてまた恥ずかしくなっちゃったの。それから穂波ちゃん是他の席の女の子と先生が来るまでおしゃべりしたの。私はほっとかれたの。私はひとりぼっちなの。

私の仲良しさんは穂波ちゃんだけなの。他の誰とも仲良くなれなかったの。穂波ちゃんは私の他にも友達がたくさんいるの。他の子としゃべっているときは私、さみしいの。だって声が聞こえても何を言っているかわからないもん。穂波ちゃんは私としゃべる時はゆっくりと大きい声でいってくれるもん。でも他の子は私のこと、笑うだけ、いいえ、話しかけても私何を言っているかわからないもん。穂波ちゃんまた幼稚園の時のように遊んでくれたらいいのに。ねえ、話しかけてよ。前みたいに仲良くしてよ。思い切って話しかけてみると、穂波ちゃんは答えず穂波ちゃんのお友達と一緒にになって笑うの。

「また変なこと言ってるー」

だから私はうつむいちゃうの。下を向くしかないの。それで運動場に出たらいつも一人でしゃがんでありさんや石をじっと見てる。幼稚園の方が学校へ行くよりもおもしろかった。遊んではかりで楽しかった。私は幼稚園の先生の笑顔を思い出す。やさしかった先生、今どうしてるかな。私は運動場の隅っこでお友達が遊ぶのをじっと見てるだけ。でもね、しゃべらなくとも話せなくともみんなが楽しそうにしていると私もちよっとうれしいの。

でもね・・・でも、だんだん私を仲間に入れてくれなくなっちゃった・・・今本当に一人ぼっちなの。だってお勉強がだんだんわからなくなってきたし、先生は怒るか無視するようになるかし。



でも、私よりひどい子がいるの。私のように耳が悪いのじゃないと思うけど立田桃夫くん……。この子はいつもじつと座ってられないの。それで変な声をだしたりして授業を邪魔していつも怒られているの。すぐに「かはい」という先生が来てこっちで座りましょう、というのでも無視して騒ぐの。

先生が画用紙を持ってくると黙つてすわっている。いろいろな絵をかいたりするの。その時だけは静かになるから、算数のときも国語のときも立田君だけ図工の時間になつてきたの。いつも隅つこの席で黙つて絵を描いているの。私も時々席をたつて見に行つたりするの。立田君は他の誰にもクレヨンとかかさないけど、私には時々かしてくる。画用紙の隅に手をトントンとして「鈴華、お前こゝ書いてみるよ」という。ハートマークやお花を描くと「よくかけたな」とほめてくれるの。こういうときの立田君はお絵描きの先生みたい。かっこいいよ。

そうしているうちに先生の冷たい顔つきに気がついてあわてて席に戻るの。それから教科書を開いたりするけど、もう全然わからない。

[illegible]

でも何があつたのか今日は変わったことがあつた。朝礼の時も私、前の方はきちんとみてたけど日直の人が何をいつてるかわからないのでぼうつとしていたけど何度も先生と目が合うの。でも先生は怒つた顔をしないの。びつくりしてじつと見ると先生は軽くうなづいて少しだけだにこつとしてくれた。

それからね、もう1つあるの。お昼休みの時間に皆見先生が私の

机のところに来たのよ。びつくりした。また怒られるかと思ったけど違った。お勉強を教えてくれたのだ。私の机をはさんで2人だけで勉強したの。算数だったよ。おはじきを使って数を数えたの。上手に数えられたわねってほめてくれた。

それからまだあるの。今度は指を使ってプリントの数を足していくの。わからなかったけど少しだけわかったような気になった。皆見先生がゆつくりしゃべってゆつくり教えてくれるとわかるようになったの。私初めてわかるって楽しいことだと思ったの。

それを先生に伝えたら先生はとてもやさしい顔で私の頭をなでてくれた。私泣きそうになったよ。嫌われていると思ったけどそれは間違いだった。いい先生だった！ほんと、うれしかったの。

わかればお勉強は楽しい。上手にできると皆見先生もにこっと笑ってくれるの。穂波ちゃん「えこひいきー」「あんなにうれしそうな顔をしてーうざー」とかいったけどでもそうじゃないの。私はお勉強は本当は大好きなのよ。だから席を立ったりしないように気をつけてるのよ。やろうと思えばじっと座れるのよ。ねえ皆見先生、皆見先生が私だけの先生になったらいいのに。でもそうじゃないもんね。私これから、もつとがんばるよ……。

「……………」

でね、だんだん立田君の授業の邪魔がひどくなってきたの。機嫌のよいときはじっと座って絵を描くけど機嫌が悪いときはもうめちやくちやだもん。奇声をあげて先生の声が聞こえないようにするし、黒板の字を勝手にけしちやたり……。かはいの先生が落ち着くように言ってもだめだった。今日なんか皆見先生の髪をひっぱって先生を泣かしちやった……。あの時はとなりのクラスの先生も来て大変だった。

立田君はケンカもよくするの。しかも結構力があって強い。立田

君はすぐ怒るしすねるし。私もすねちゃうけど立田君は立ち直るまですごく時間がかかるしみんな迷惑するみたい。だってすぐ物を壊すしすぐお友達を殴るの。

特に隣の席の飯田君とはいつもケンカしている。

こいつばかだーと言っただけで立田君は飯田君をかんたり蹴ったりするの。さつきは特にひどくて原因はよくわからないけど飯田君の口の中から歯がとれちゃった。口のまわりが血だらけになった飯田君は大きいお兄ちゃんにいいつけてやるーとものすごく泣いたの。ものすごい大喧嘩になっちゃった。

私は教室の端っこに身を寄せて固くなっていた。穂波ちゃんの集まっていたところに行きたかったけどもう仲間には誰もなってくれない。皆見先生は今日出張でいないので来てくれないしどうしていいかわからなかった。飯田君をおもいきり殴った後、立田君はふんといつて机にすわって絵を描き始めた。飯田君は顔を血だらけにして大きな声で泣いていた。

誰かが呼んだ保健の先生にひかれて飯田君は歯医者さんへ行っみたい。そしてそのまま帰ってこなかった。

今日は5時間ある。最後のお勉強が終わった後は掃除の時間だ。今日の黒板をきれいにするお当番は私と穂波ちゃん。そこへ6年生の男の子が4、5人教室にやってきた。大きい学年の子が1年生のクラスにやってくるなんて考えられないことだ。みんな掃除をやめて大きい子をじっと見た。

掃除の時間でも床に寝っ転がっていた立田君を囲んで「おい、お前が立田だろ、ちょっとこい」と言った。立田君は返事をしない。歌を歌っている。

「バカかお前、俺の弟をこけにしやがって」

一番大きい子が立田君のお腹をふんづけた。立田君はぐえと言って怖い顔して起き上がった。ふんづけたのは飯田君のお兄ちゃんだとわかった。でも立ちあがった立田君は飯田君のお兄ちゃんと比べ

てすごく小さい子に見えた。殴ろうと向かっていったがひたいを小突かれてまた仰向けに倒れた。

あとの子が立田君を無理やり立たせて教室から連れて行こうとした。立田君は嫌がつて暴れたけど飯田君のお兄ちゃんがぐーのパンチで頭を何度も殴つてぐったりさせた。

うごかなくなつた立田君を3人がかりで抱っこしてどこかへ連れて行つたの。

誰かが「たいへんだ。先生をよばないと」と言つたけど誰も動かなかった。私も大変だと思つた。もしかしたら立田君は殺されてしまふのかしら、と思つたの。

どこへ行くのか、裏門の方だ。私はそつと後をつけたの。穂波ちゃんが何か言つていたようだけど私にはよくわからない。大きいお兄ちゃん達の後をとことこ歩いて行つたの。1年生の教室の廊下の角を暗い方に曲がると小さなドアがあつてそこから裏庭になつて裏門がある・・・。

そこには飯田君のお兄ちゃんよりももっと大きなお兄ちゃん達が何人もいた。みんな黒い制服を着ている。中学生か高校生かはわからない。なにかを言い合つている。聞こえないけど聞こえるように私は集中したの。うんと「集中」したら聞こえるもん。じつとしていたら声が聞こえてきた。

「・・・そいつか」

「うん、母ちゃんもすごく怒つてる。だからせいさいってやつをお願いします」

飯田君のお兄ちゃんもつと大きいお兄ちゃんに言った。

「だってそいつばかなんだろ？大丈夫か」

「ちゃんとしゃべれないみたいです。授業も邪魔ばかりで、」

「ふーん」

とすると立田君が目を開けて「頭が痛いぞ、ばかやろう」と言ったの。

「まじほんと、生意気な奴だな」

立田君は寝転がったままだ。起き上がるうとしてもできないように周りの人が手足を押さえた。飯田君のお兄ちゃんが小さくまるめたタオルを立田君の口に詰めた。それを合図に一番大きい黒い制服を着たお兄ちゃんが立田君を足で蹴ったり殴ったりした。5人ぐらいよつてたかつて「せいさい」をしたの。ドカ、とかドスという音が聞こえる。立田君の腕や足が黒いズボンから見え隠れする。私は怖くて震えていた。立田君が動かなくなるとみんなが立田君を抱えてそばにある「しょうきやくろ」に放り込んだ。それから知らん顔してふたを閉めた。飯田君の大きいお兄ちゃんも知らん顔だ。

・・・それからの記憶が私にはない。どうやって家に帰ったのか覚えてないの。

私もいつかあんなふうにな「せいさい」がされるのかしら。だって私と立田君はクラスの嫌われ者だもん。誰も助けてくれないもん。こうやって「しょうきやくろ」にゴミのように放り込まれるのかしら。

1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7
8	8
9	9
10	10
11	11
12	12
13	13
14	14
15	15
16	16
17	17
18	18
19	19
20	20
21	21
22	22
23	23
24	24
25	25
26	26
27	27
28	28
29	29
30	30
31	31
32	32
33	33
34	34
35	35
36	36
37	37
38	38
39	39
40	40
41	41
42	42
43	43
44	44
45	45
46	46
47	47
48	48
49	49
50	50
51	51
52	52
53	53
54	54
55	55
56	56
57	57
58	58
59	59
60	60
61	61
62	62
63	63
64	64
65	65
66	66
67	67
68	68
69	69
70	70
71	71
72	72
73	73
74	74
75	75
76	76
77	77
78	78
79	79
80	80
81	81
82	82
83	83
84	84
85	85
86	86
87	87
88	88
89	89
90	90
91	91
92	92
93	93
94	94
95	95
96	96
97	97
98	98
99	99
100	100

目が覚めるともう朝だった。パパとママが私を見下ろしていた。二人ともとっても疲れた顔をしていた。

「鈴華、あんた昨日の夜のこと覚えてる？」

またか・・・、私はまた起きて叫んだり泣いたりしたのかな？

「覚えてない」

「今日は学校をやすみなさい、それから病院へ行きましょう」

「どこも痛くないけど」

「ママの言うとおりにしていいから。」

私はきのうのことを思い出した。立田君はもうごみと一緒に燃やされたかしら？ママにそういつたらママの顔色が変わった。そこへ

電話が鳴った。パパが電話を取りに行った。

「おい、PTAの連絡網だって、出てくれ」

ママが電話を取った。ママのはい、はいという声がする。

ママがまた私のベッドに来た。

「鈴華、あんたやつぱり今日休みなさい。先生には言っておくから」  
私はうなづいた。

「ねえ、立田君は？」

ママはびくつとした。言うか言わないか迷った顔で教えてくれた。  
「今、連絡があつたの・・・。立田君は救急車で病院に運ばれたそうよ。昨日の夜のうちに手術して、命は助かったようよ。鈴華、あんた暴行の現場にいたの？」

私は泣こうともしてないのに涙があふれ出た。ママはやさしく抱いてくれた。

「かわいそうに・・・、びつくりしたのね。立田君は大丈夫だから。落ち着いたらお見舞いに行きましようね」

それから病院の予約をしてくれると言ってベッドから離れた。

パパも私の頭をずっとなでてくれた。悲しそうな顔をして私の涙をタオルでふいてくれたの。心配かけてごめんね、大好きだよパパ、ママ。

立田君、助かってよかったね。病院へ行くと会えるかな。私、立田君に会ったら痛かったでしょう、すぐに助けてあげられてなくてごめんね、と言いたい。それでまた2人で大きな画用紙と沢山のクレヨンでいろんな絵を描こうね！と言いたい。お見舞いには新品のクレヨンがいいかな。だって立田君も私もお絵描きが一番好きだからクレヨンがすぐにちいさくなるの。

ママがお盆にトースターとオレンジジュースをのつけて持ってきてくれた。

「今日は特別サービスよ。ここで食べてもよろしい。だけどこぼさないように食べてね」

「ママ、ヨーグルトもある？」

「あるわよ。よかった、食欲が出たのね？きのうの晩は何も食べてくれなくて心配したわ」

「あたし、覚えてないの」

ママは心配そうな顔のままでパパに言った。

「予約が遅いけど今日の4時に取れたの。ここからは遠いけど県立中央病院の小児科へ行ってくるわね」と言った。

「病院へなにに行くの？立田君のお見舞いにも行くの？」

「いいえ、鈴華がよく眠れるお薬がいると思うのでもらいにいこうと予約したの。先生には礼儀正しくしてね」

「わかったわ、ママ」

窓から青いお空が見えた。スズメもちゅんちゅん鳴いている。昨日の朝と一緒にだ。でも、もう今日の朝だもん。だから似ていても一緒に見えても、昨日と今日は違うもんね。

大丈夫。今日の朝は大丈夫。今日は病院へ行つて、今晚よく眠れるお薬をもらってそれから次の朝が来る。そしてまた学校だ。飯田君はもう大丈夫かな。立田君はけががなおって学校へ来るかな。そしたら仲直りしてくれるかな。飯田君も立田君もクラスの仲間だよ。鈴華もクラスの仲間だよ。みんな仲良くできたらうれしいよね。皆見先生もきつとやさしい笑顔で笑ってくれるはず。

鈴華はやっぱり学校が大好き！

鈴華はトースターをほおばりパパとママに、にこっと笑ってみせた。

## 小児科医・長与のいつもの長い1日

長与はもう30年以上小児科医をしている。

地方の大学に入学。そのまま大学病院に入局して10年。結婚してからこの地方の私立病院に勤務してきた。ここで20年。合計30年。小児科医としてずっと第一線で働いてきたという自負がある。今現在が最も医師として脂がのりきっている時期だろう。

この年になって、同じ医師として60歳で急逝した父親を良く思い出す。長与の生家はP県南部の田舎の小さな診療所だった。父親は専門医ではなくいわゆる田舎のなんでもやの医師だった。深夜でも容赦なく診察要請の電話がかかってくると寝床から抜け出す。ふすま1枚をあけるとそこがもう診察場だった。ベッドの上に置いてあるよれよれの白衣をひっかけて背中を丸めてでていく父親の姿を何度見たであろうか。

母親は父を支える看護師だったが、お父さんみたいな人は偉いけど私達も休めないし贅沢できないしある意味貧乏くじをひいたのよね、とよく愚痴をいったものだ。長与はうんうん、とうなづき、私は絶対医者になるもんか、ぜいたくして楽しんで暮らしたいと思いつつもなぜか医学部をめざしすんなりと合格したのだ。合格を報告した時のあの時の父親の顔ったら！40年も前の話なのに父親の顔を思い出して長与は今でも泣きそうになる。

朝の光が医局のカーテン越しにはえる。空が青い。ブルースカイ。真っ青なきれいな空。5月になったばかりなのに今日も暑くなりそうだな。日射病がそろそろ出てくるころだ。まだ花粉症がやっている。年中喘息発作の患者は昼夜問わず誰かが入院している。それと風邪の延長の肺炎。気管支炎。それがここの小児科の大半の患者だが合間に怪我や交通事故、どうかすると心療内科の分野にまたがる患者。数はごく少ないが良性もしくは悪性の腫瘍をもつ患者。そして近年増えてきている被虐待患者。外部組織のケースワークと



の連携も必要でこれまた簡単な仕事ではない。長与みたいに同じ病院に長く働いているとひとりの小児の病気の患者はみつくたといってもよい。だが仕事は甘いものではなく、ここの病院での対応が無理なケースでは2時間離れた都市の中心部にある国立病院への紹介状を書くなり、また救急でへりを飛ばしていく症例も年に何回かはある。

「先生、もう8時ですね。今日も外来がぎゅちり。予約制のはずなのに空いた椅子もないっすよ」

あくびをしながら入ってきたのは昨夜の当直医の押田だ。この押田も60近い脳神経内科医だがこのあたりでは医師の数自体が少ないので、専門や年齢や階級にも関係なく容赦なく当直が割り当てられる。長与も専門が小児科医とはいえ、当直では内科外科関係なしになんでも診る。当直しないのは院長と副院長ぐらいだ。大学病院や都市の大病院なら当直はもつと若くて体力のあるヒラの医師がするものだ。

「ああ、ぼくはもうトシなんで、早くお役御免になりたいな」

「まあ、押田先生がばやくなんて、おめずらしい、きのうも忙しかったのですか？」

「いつも忙しいさ。ひまなんて思ってたこともない」

「ですよ」

「交通事故が1件、てんかんの発作1名。こっちはごく軽くてすんだ。と静脈瘤破裂と脳梗塞もでたね。あつ、そうそう、小児科も入院させたのが一人いる。これは外科と共同で診ないとね。この子は脳挫傷でね、7歳の男の子。手足の骨折もありで、大けがだよ。手術が必要なんで川本先生に助けてもらったよ」

「川本先生は病棟に詰めておられたんですね。川本先生に診てもらった患者さんはラッキーでしたね」

「この地方で脳外科医なら川本だ。いてくれてよかったさ。さっきもう帰ったけど」

「救急とICU（集中治療室）は朝から大忙しですね」

押田は帰りかけたが、そうそうと長与のそばによった。

「さっきいった脳挫傷の子な、多人数にやられたらしい。警察沙汰になりそうだよ」

「7歳といってましたね。虐待ではない？」

「虐待ではない。殴った相手は親ではなくて・・・あれは、いじめかなにかですかねえ」

「いじめですか・・・」

「男のこだし、多分ケンカだろう。ただ年上の男の子達によってたかってやられたらしい。名前は立田桃夫」

外来診察は8時半からだ。後20分ほど時間があるかな、長与は時計を見てICU病棟に少し上がることにした。ナースセンターによると朝のカンファレンス中だったが長与を見かけて婦長が手招きをした。

「おはよう」

「長与先生、昨日夜7歳の男の子が、」

「うん、今押田先生から聞いたの、それで少し診ておこうかと」

「容態は落ち着いています。命には別条ありません。まあ大けがにはちがいないですけどね。親御さん2人とも来られています」

長与は電子カルテをあけパスワードを入力して立田桃夫の項をざっと閲覧した。

立田桃夫。7歳。萌木小学校1年生。夕方学校の裏庭にある焼却炉の中から音がするので巡回中の教師が中を開けた。そこで彼を発見したらしい。意識混濁状態で開眼あるが声が出ない。頭部裂傷からの出血がひどく近医では対応できず、こちらに救急車で搬送。脳挫傷位置を確認後に手術。呼吸に若干乱れあり。中枢に影響あるか後遺症の有無は現時点では不明。

昨夜の当直が脳外科医の川本で本当にこの子は幸運だったなと思う。この地方では最高の救急治療が受けられたことになる。まあ、

本人や家族にはわからないだろうけれど。川本の詳細な記録を頭にたたきこみつつ立田桃夫の部屋に行く。手術室のとなりのリカバリルームだ。一番端にカーテンでぐるりと囲まれた一角に立ち寄った。

カーテンのすそからそつと手を差し入れ「失礼します」と声をかけた。

母親らしい女性が疲れた顔でカーテンを開けた。

「おはようございます。立田さんですね。このたびは大変でしたね。小児科医の長与と申します。外科と共同で診ます。意識が回復するまではしばらく栄養剤の点滴ですごしていただきます。朝夕診察しますのでよろしく願います」

こついいながら付属機器のチェックをする。本人はまだ意識がなく目を閉じたままだ。血管確保のチューブ、点滴チューブ、尿道カテーテルその他種々の管と酸素吸入器が痛々しい。頭は当然包帯でぐるぐる巻きにされている。

「まだ目が明かないんです。呼吸も荒くて」

母親は一睡も寝てないのか疲れた表情だ。

「大勢で殴られたらしいです・・・ゆるせない・・・顔も身体もこんなに傷だらけ・・・」

長与はうなづいた。母親の身体はわなわなとふるえている。目じりには涙が浮かんでいる。

「足も骨折しています。どれだけ痛かったでしょう、絶対にゆるせない・・・」

父親が目をふせている。母親が小声で言う分怒りが十分伝わってくる。

「リハビリなどは今後のことは後日ということで、今はとにかく意識を取り戻して、一步一步日常生活に戻れることを考えましょう」

長与は母親の肩に軽く手をふれると母親はこくこくとうなづいて頭を下げた。椅子に座ったままの父親も頭を下げる。

長与の今日の予定は午前は外来、午後から病棟をまわり、3時以降からまた外来に戻って今度は心療内科にかかる。そもその専門は小児呼吸器分野が得意だが田舎ではそんなことはいつてられない。内科外科耳鼻科泌尿器科眼科脳外科脳神経内科内分泌科小児神経科・。ああ、生前の父親と変わらない。なんでも屋みたいだ。

小児分野の心療内科は週2回だが診れるのは長与と金曜日のみ大学病院からやってくる助っ人の助川だ。この助川は27歳で去年から来てくれている。心療内科医としてはよく勉強しているので診断は確実だがどうも患者をした眼にみるくせがあるようでたまに名指しで御意見箱に匿名の患者から苦情がでることもある。小児科部長としてはなんとかしないとイケないが、双方ともに忙しくなかなか2人だけでゆっくり話す機会がない。

午前中はひたすら患者の診察にかかり、病棟には病棟のルーチンワーク（決まり切った仕事）をこなす。あちこちから先生！との声がかかる。

あいまを診て遅い昼食を取る。病院内の食堂に医局まで出前を頼む。いつ緊急呼び出しがくるかもしれないのでいつでも食べられる日替わり弁当か、冷めてもおいしい焼きそばにしている。

あつという間に時間がすぎる。今現在夕方5時半。電子カルテを見ると外来はあと1人。初診の患者だ。4時の予約になっているが他の初診患者や直近の患者に手間取りこんな時間になってしまった。やれやれ、これで終わりか、の安堵感もでて声もやさしくなる。初診用のあらかじめ書いてもらった問診票も見る。うん、これなら簡単に診断がつきそうだ。解決には時間がかかるかもしれないが、「じゃ、次の人呼んで」の合図で窓口のクラーク（事務員さん）がマイクで名前を呼ぶ。鈴木鈴華さま、1診へどうぞ！

カーテンの開く音がして母親とそのこどもが入室してくる。子供は7歳、小学生1年か。小ざっぱりとしたブラウスとスカート姿だ。長与は初診の親子を注意深く見た。入室する様子はたったの2、3

秒だがそれで親子関係の大体が把握できることが多い。いわく親と子供どっちが先に入室するか。どちらから声がかかるか。親子の会話、様子。特に患児の表情は重要だ。

母親はこどもの肩に両手を置いて椅子に座らせた。そして自分はわきにたつて丁寧にあやめる。母娘ともに緊張しているようだ。そして疲れきっているようにみえる。しかし長与の顔を見て安心もしている。長与は自分が女医というだけで安心感を覚えてくれる患者がいるということもよくわきまえている。

明るい笑顔を心がけて長与は親子の顔を交互に見て「こんにちは」とあいさつした。

母親は話すことに慣れていないようではしつつかえながらも丁寧に子供の様子を説明した。

「この子はLDの診断を3年ほど前に発達障害センターで受けて毎週1回1時間だけです療育をうけています。小学校にあがってから学校へ行くのを渋るようになりました。ひどく嫌がるわけではなくですが最近深夜になると夢遊病というのか夜中に起きだして泣きながら走ったり歩きまわるようになったのです。どんなになだめても泣きやみません。やっと泣きやんだと思ったらそのままぐたつとして寝ます。それで朝起きたらまったくそれを覚えていません。

昨日は特にそれがひどくて、私もこの子も眠れませんでした。それで何かいい方法はないかと・・・」

「学校は普通学級ですか」

「はあ・・・普通学級で大丈夫だろうといわれまして・・・」

「LD過去の検査などがみたいのですがお持ちですか？」

「あ、はい」

発達障害センターでアドバイスを受けていたのか母親はバッグから封筒を取り出した。分厚いファイルを持っている。母親がパソコンなどで集めた資料が全部入っているようだ。一番上に鈴華の検査結果をのせていた。（窓口で先に出してくれたらいいのに・・・もうっ）  
こっというのは親子に会う前にあらかじめひとりで見たい。長

与は心のうちでばやきながら最新の検査の日付を見てパラグラフをさがす。

知能指数は確かに正常域に入っているが知覚知能と運動知能に有為に差がある。やや軽いLDだ。検査者の名前も知っている。ベテランの大島の名前があつて、彼女はもう定年近いはず、元気かなとちらと思つた。

それから長与はこどもの顔を笑顔でのぞきこんだ。

「こんにちは」

「・・・こんにちは」

はにかむように鈴華はあいさつした。ちゃんと目をまっすぐにあわせてくれた。

「学校、嫌いなんだって？」

鈴華は横に立っている母親の顔をちらと見てから黙つてうつむく。7歳ならもう一人でしゃべれるだろう。しっかりしている子のようだし。長与は母親に外来のソファで待つように指示して、鈴華と二人きりになった。

にこつと笑うと笑顔を返してくれる。握手してみようか、という握手してくれた。二人きりで笑つてみる。長与に安心したのかいつも置いている机の上の子供が好きそうなおもちゃやポスターを眺めはじめた。素直な子だ。

それからもう1回問うた。顔をのぞきこむようにして笑顔で聞いてみる。

「学校、嫌いなんだって？どうしてなんだらうかね」

「・・・私友達もきらいなの。だって誰も私とお友達になつてくれないもん」

この一言をいうのに勇気がいる子もいる。初対面の私によく言ってくれたなと鈴華に感謝していった。

「そうかー、先生も小さいときは学校、あんまり好きじゃなかった」「ほんとー先生もー？ほんとー」

甘えた声で言う。二人でふふふ、と笑いあつた。

「今の学校が嫌いならどうして嫌いになっちゃったのかよく考えてみよう。世の中いるーんな学校もあるし、いっぱい方法があるからね。心配しなくていいよ」

「私夜中に泣くんだったて、でも全然覚えてないの。よく眠れるいいくすりと注射があるかもしれないから、もらいにいこうってママがいうの」

「うーん、あるかもね。でも鈴華ちゃんにはいらなかな」

「あのね、わたし夜すごく泣くらしいの、ママが言ってる。パパとママ、昨日の晩も私が泣くので寝れなかったって。でも本当に、全然、覚えてないの」

夜驚だな、と思った。昼の出来事をちゃんと自己で昇華できなかったややおとなしいといわれる子の反応の1つだ。

「ご飯は食べれる？おいしい？」

こつくりとうなづく。

「給食は？」

鈴華の顔が硬直したようになった。長与はもういいよ、というふうにこつとした。

「大丈夫だよ。じゃ、ママと交代してくれる？」

「私、あたまがおかしいの？」

「いや、ぜんぜん。だいじょうぶだよ」

「療育いつてるのって頭がおかしいって。ママのお友達のおばさんがそういつてた・・・」

「そんなことを言う人いるんだー」

長与の顔がくもる。かわいそうに。どこの世界でもそういうことをいう人はいる。その人こそおかしい人たちなのだ。罪の意識もなく何気なくいう善良な人たち・・・。

療育へいくことだけではない。小児科医を長く続けていると患者達のつきあいも長くなる。治療に使う薬の影響である特異な症状がでてくることもあり、またそれが目立つといじめの対象になったり

もする。

この病院にも入院が長期にわたる子供のため院内学級もあるが、退院して通常の学校に戻って喜んでいたと思うと1週間で学校が嫌いになったと登校拒否になってしまった子供がいる。このケースは副腎皮質ホルモン剤による副作用の1つのムーンフェイスをからかわれたのだ。確か小学校の5年生の女兒でそろそろ自分の外見が気になる年頃だ。彼女はクラスメートからからかわれただけ傷ついたことか。繊細な神経をしていた子だったのでこの子にとってはからかいといじめによる孤独は耐えきれず自殺を図った。幸い助かったが心のケアは今もなお必要な状態にある・・・。

「鈴華ちゃん、まあ、気にしないことね」

長与はその一言で解決にならないことは承知しているが言わざるをえない。鈴華はふたたびこっくりした。いい子だ。

「じゃママと交代してくれる？外で待つてね。あ、くすりも注射もないからね」

カーテン越しに鈴華の声が聞こえる。

「ママー、くすりも注射もないってー」

あらわれた母親は少々不満顔だ。

「あの子は幼稚園では問題なく過ごしていました。多分クラスメイトとの気があわないのです。夢遊病みたいになっちゃって・・・私達も眠れないので気が狂いそうになります。昨日はクラスの桃夫くんが殴られたといってずっと泣いているし、寝付いたと思ったら泣き叫ぶし、くたくたです」

「えっ・・・桃夫くん」

「ええ、立田桃夫くん。同じクラスの子です。発達障害センターで何度か会ったことがあります。もつともあちらはLDでなく重症のADHDらしいですけど、その子はきのう大怪我をして救急車で病院へ行つたと聞きましたがかもしかして・・・」

長与は肯定も否定もしなかった。はっとして母親は食い下がる。



自分の子のことできたのだ。夢遊病を治すよい薬はないものか。

「それで先生、神経をなだめる良い薬があれば・・・欲しいのですが。」

「この場合は薬はないです。これは夜驚といって不安感が高まり起きてしまうのです。無理に起こさせてはいけません。気分がおちつけて自分の感情がある程度コントロールできるようになると自然となくなりますよ」

「でもまるで気が狂ったように泣くのですよ。私達も眠れません・・・睡眠薬か精神安定剤をください」

「薬はないです。とにかく様子を見ましようね。ずっと続くようでしたらまた診せにきてください。」

長与はきっぱりと言った。親御さんの気持ちはわかるが小児に薬を処方するまでもない。親御さんの気持ちばかりすぎて薬を出す医師もいるだろうが長与は感心しなかった。もともと薬はなるべく出さない主義である。成人はストレスや強い緊張感で連続して夜驚が出た場合は抗鬱剤を出すこともあるがこの子には回数は多くとも1、2分で収まるらしいし当面は不要だろう。またまだ幼い子供に安定剤の類は与えたくなかったこともある。

母親はせっかく来たのに、長らく待たされた末にこれか、と不満を顔にだしたがそれでも頭を下げた。長与も会釈をしてそれから診療記録をPCに書き込むべく画面に向かう。

立田桃夫と同じクラスか・・・。もしかしたら桃夫がいじめられているのをあの子は見ていたのかもな。母親が昨日の晩は特に夜驚がひどかったといっていた。多分この推測は当たっているのかもしれないと感じた。もちろんこれは余計な推測というもので鈴華への診察には関係のない話だ。

外来はこれで終わり、というわけでまた医局に戻って遅い休憩を取った。冷たいお茶をすすりせんべいをかじった。お腹がすいているのがわかりクッキーもついでにつまむ。このところお腹がでてき

て少しやせねばと思いつつつまむ手が止まらない。窓を見るともう夕方になってる。今日は1日晴れていたらしく空がまだ青い。だが西の方は薄赤い夕焼け雲は浮かんでいる。あと1時間もすれば夜になるだろう。といっても帰れるわけではない。抄録の資料も製薬会社が持つてくる医薬品情報提供も山積みだがこれから病棟へも行かないといけない。

立田桃夫の意識は回復したのだろうか。まずICUのナースセンタ―に顔を出すと主任が彼の意識が戻ったことを告げた。

「そ、よかったね。一段落つくかな」

「でもね、今校長先生と担任の教師らしいのが来てますがあれ、きつと揉めますよ」

「押田先生も警察沙汰になるだろうといっていましたかね」

「さつき病室で桃夫くんのお母さんが校長先生を殴ったのよ」

「あらまあ、お父さんではなくお母さんが？校長先生を、へええ」

「ま、女の腕ですからね、校長に怪我はありませんでしたけど、お母さん金切り声で校長先生と担任の若い女の先生を責めて責めて・・・2人とも逃げるように帰っていました。先生に対してもあれなんで、もし加害者側が見舞いにでもきたらまた騒ぎがおこるでしょうねえ、」

「とにかく患者の治療の邪魔になりそうだったら止めさせて。当面会謝絶にしましょう。また病院側としては争いに関知しないことを心がけて。介入も感情移入もだめよ」

「わかりました、もちろんのことです」

電子カルテを開けて桃夫の診療記録と看護記録を確認する。意識が戻ったのは2時間前か、まだ予断は許せない。あと2、3日はICUからは出せないだろう。長与は病室まで行った。カーテンだけで仕切られたブースに入る。桃夫は寝たまま目を開けていた。手足のギプスが痛々しい。母親は桃夫に覆いかぶさるようにしている。父親はいない。母親は桃夫にかぶさったまま長与に会釈した。

「ああ、先生。さきほどうちの桃夫が目を開けました。手も少し動いたですよ。ああ、うれしいこと！」

泣き笑いのような笑顔だ。この細い身体が7歳の重症の子供を守るために校長を殴り、担任の教師をのしつたのか。まったく寝てないのか目にくまが黒くはいつているが純粹に子供の意識が戻ったことを喜んでいる。

「ああ、桃夫。大変だったねー、桃夫。桃夫。もう大丈夫だよー、もう怖くないからね、ここは病院だよ。あの人はお医者さんだからね！」

「お母さん、お母さんは決してお子さんの身体を動かさないように。また面会もすみませんが1回につきご家族であつても30分までとなつていますので」

「わかつています。でもこの子は特別なんですよ。ごく軽いですけどADHDでね、ちよつと配慮が必要な子なんです。でも私がちゃんと言つてきかせればわかる子ですから、どうぞご心配なく」

「ああ、そうですか、その話は後で聞かせていただきますね。ちよつと診察したいので席をはずしてくださいね」

「でも、そばにいたいので・・・」

つきそつてきた主任がきつぱりと断つた。

「立田さん、規則ですので申し訳ないですが廊下で待つていただけますか」

不満そうに母親はのつそりと立ち上がりカーテンを開けた。すると桃夫が「あー、あーあー」とかぼそい声をあげた。

母親は我が子のもとに引き返す。

「ああ、桃夫ちゃん！私の桃夫ちゃん！」

長与は聴診器をあてようとシーツをはがす。それを合図に主任が母親の両肩にそつと手を置いて廊下に出した。桃夫はじつとしていた。

「桃夫ちゃん、よくがんばったね、しばらくこの病院に入院して早く怪我を治そうね」

返事はなく聴診器に興味があるのかそれをずっと目で追う。長与はかがみこんで桃夫の目を覗きこんだ。桃夫の追視はない。目があわない。だがADHDらしいので即断は禁物だ。光を当てる。左右の瞳孔の開きに差はなくどうやら脳出血はないようだ。よかった。桃夫は聴診器を見よう、見ようと首をのばしている。痛さよりも好奇心が勝つのか、まあ良い兆候だろう。この子には症状に見合った看護も必要だ。カンファレンスにあげて皆に周知しないといけない。

長与は聴診器をはずしてポケットに入れた。

「じゃあね、先生はまた来るから。ゆつくり休むのよ」

廊下では母親が1人ソファに座っている。さっきまで携帯電話でメールをうっていたようだ。長与を見て腰をうかせた。

「先生」

長与はうなづいて

「すみませんが携帯はメールであっても指定の場所があるのでそこで、ね」

「あゝはい、はい……。で先生さきほど主人が警察に行つて被害届を受理してもらったんですって」

「わかりました。その話も後日伺います。ところで立田さん基本的にこの病院は付き添い不可ですのでね、くわしいことは婦長をよこしますのでよく相談してください」

「でもあの子は私がいないと、」

長与は母親と今は議論したくなかったのであいまいにうなづいて「じゃあ、また」と言つてその場を辞した。

それから小児科病棟を再度まわり、急性期に陥つた患児をいないことを確認する。廊下には人がまばらだったが談話室にはいくつかの家族らしい人がいて長与を見かけてこぞつて長与に会釈する。みな自分の子供が心配なのだ。長与の責任は重大だ。

一回りしたうえで医局にやっと戻った。もう夜の8時をまわっている。今日はスーパで買物をしないといけないし、家に帰ればもう

9時半はまわっているだろう。そして遅い夕食をとってお風呂に入れば12時をすぎる。明日は当直が入っているし今日は早めに休まないと身体に負担がかかる。長与は父親の寿命の年に近づいているのを自覚している。父親のように仕事をしすぎて突然死はしたくなかった。

「あー、今日も長い1日だった」

明日の診療に備えて予診もしておかねばならない。来週は医師会の会合と研修、3ヶ月後にはF県で学会発表もあるし、加えて自分の勉強もしておかねば日進月歩の最新医療に後れをとってしまう。やらねばならないことは山積みだ。

「さ、今日は店じまいしよう」

長与は誰もいない医局のロッカーで手早く私服に着替え病院の通出口から出た。おりしも救急車が1台敷地内に入って行こうとするところだった。病院で流れる時間は切れ目がない。救急車の中にいる患者は重症の人かそれともなんでもない軽症の人か。長与は救急車をちらと見た後は完全にその存在を忘れた。だって今日はもう仕事は終わったのだから。

長与は駐車場までゆつくりと歩いて行った。高熱が出てけいれんを起こした乳児、喘息発作をおこした常連の児童、そして今日の外来で出会った鈴木鈴華、ICUの立田桃夫とその母親。一番印象深いのは桃夫の母親だろう。彼女は自分の子供が一番だ。だからこそ学校側の見舞いに対応に何らかの不満をもって校長を殴ったにちがいない。

以前から学校側と児童側との意思の疎通がなかったのかもしれない。もめるのは確かそうだが病院側としては絶対にかかわらないようにしなければいけない。ただでさえ忙しいのに診療以外のわずらわしいことは一切関知したくなかった。

だがどの親も虐待をしない限り自分の子供が一番に大事だ。一番に丁寧に診てもらい最高の治療を受けたいと望む。それは当然のことだ。そして病気やけがを治してもらって当然だと思っている。そ

れも当然だ。

急な発熱で熱性けいれんをおこし半狂乱のていで駆けこんできた親。子供の頭痛を心配し脳腫瘍ではないかちゃんと精密検査をしろといってくる親。我が子に障害があることを告げられ呆然自失な親。みんな我が身をさしおいても我が子が心配なのだ。

逆にどうして今まで放っておいたのか子供の状態に無関心、無知、そしてその行動に理解に苦しむ親もいる。こういうのがモンスターペアレントなんだろうなと思わせられるささいなことで苦情を申し立てる親もいた。本当にいろいろだ。

誰も長与の激務はわかってもらえない。

それも当然だ。他人だもん。それに医者だから。

私は医者で治して当然の存在なのだ。

私の治療で治った、もしくは良くなって先生お世話になりましたと頭を下げてもらう。

ときにはあまりの激職に心が折れそうな時もある。でもこの年になつたらだれも助けてくれないし、仕事全般全部が自分の責任になる。

子供の屈託のない笑顔だけが長与がこの終わりのない困難な仕事の原動力となってくれる。患児の笑顔で自分の職業が役立ったと満足感と存在意義を自己確認する。心の奥深くで……。

今日出会った印象深い患児を思い起こしつつ、長与は車のキーを取りだした。

星が瞬いている綺麗な夜空だな、とちらりと思った後、あとは夕ご飯何にしようかと現実的な私事の考えごとに没頭していった。

## 小児科医・長与のいつもの長い1日（後書き）

ワーカホリック長与には全く別の小説で名誉挽回のチャンスをおきたいですね・・・。（実際こんなもんじゃないかな。医師はなんでも解決できる人種じゃないです。）子供の身体的、精神的な支えになるのは結局は家族もしくは子供が信頼している家族に替える人たちです。読んでいただき有難うございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3912p/>

---

THE SKY BLUE IN THE SKY

2011年5月7日21時25分発行